関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

ヘルマン・ヘッセと第一次世界大戦

その他のタイトル	Hermann Hesse und der erste Weltkrieg
著者	青山 豊
雑誌名	独逸文学
巻	20
ページ	87-104
発行年	1976-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017823

ヘルマン・ヘッセと第一次世界大戦

青　山　　豊

自らを「非政治的」という言葉で形容したヘルマン・ヘッセは，本当にドイツの苦難の時代の中にあって，政治とかかわる事なく一人のディヒターとして生きてゆく事が出来たのであろうか．

彼は晩年になってから『戦争と平和』というタイトルで，二度の大戦に対する自分の態度を振り返り，それまでの大戦に関する幾つかの評論をまとめて再び世に出したが，その緒言に，自分が「政治的」な考察を書いたのはある一定の年代にすぎなかったという印象を与えているかもしれないが，と断って次のように述べている．

「もしも私の生涯にわたっての仕事全体を見渡して下さる読者があるならば，たとえ私が現実的な評論を書いていない時代にも，私達の足もとに燃え続けている地獄の業火について考え，破局と大戦が間近に迫って来ている脅えた感情が決して私を離れなかった事に気付かれるだろうと思います．中でもあの明日の戦争に対する不安にみちた警告であり，またそういうものとして当然道学者めいたお談議を申し聞かされ，或いはただ微笑をもって迎えられた『荒野の狼』[1]から，見かけはあまりにも時代と現実をかけ離れた『ガラス玉演戯』[2]の絵画の世界に至るまで，読者はあらゆる所でこの問題にぶっかるだろうし，また詩の中にもこの調子を繰り返し繰り返し聞かれる事でありましょう」[3]

『湯治客』(Kurgast. 1925) の中では，「モンタニョーラの隠遁者」「庭師」「黙想家」「画家」と，また『ニュルンベルク紀行』(Die Nürnberger Reise. 1927) の中でも「懶惰の人」「時間の浪費家」とアウトサイダーたる事を自嘲したヘッセも，時代の流れの中に生きる一人の人間として

政治にたちむかわねばならなかった事をこの言葉は示している．

ヘッセは27歳の時，『ペーター・カーメンチント』(Peter Camenzind. 1904)で一躍文名を高め，続いて2年後『車輪の下』(Unterm Rad. 1906)を発表したが，これら初期の作品には彼の故郷カルフやバーゼルやマウルブロン神学校時代の体験を題材にしたものが多く，既に美しい自然への憧れや精神性の強調というヘッセ文学の特徴が明白である．

『ペーター・カーメンチント』では，主人公が，山を征服し10時間もボートを漕ぐ事が出来るが世渡り上手になる事は遂になかったと告白しているが，ヘッセの作品の中でもとくに自然描写に優れたこの作品には，ルソーの「自然に帰れ」という思想が自然児ペーターの生き方に反映されていると共に，ニーチェの影響が随所に見られ，それは堕落した近代文明に対する批判となってあらわれている．当時は自動車の実用化，シベリア鉄道開通，ライト兄弟による飛行の成功などの文明の発展と共に，その一方では青少年運動，ワンダーフォーゲル運動，郷土芸術運動が起こり，人々はロマン派の詩人達のように，またそれに匹敵する程の国粋主義的傾向をもってドイツの過去に目を向け始め，自然主義から新ロマン主義への逆行という風潮が物質万能文明の急速な発展に対する反動として広がりつつあった．因みに第一次大戦までのヴィルヘルム二世治下の帝国主義のもとでの資本主義興隆の時代においては，かつてのビーダーマイヤー文学にみられたように政治的，社会的方面への関心は薄く，概して主観の世界へ閉じこもり，詩の形式美や官能美にふけり，神秘的象徴的傾向に走り，郷土文学に沈潜するという傾向が，殊に政治的後進性が問題になるドイツにおいては，その文学的な特徴でもあった．このような時代的背景はヘッセの資質と調和し，その文学生活は平和のうちに過ごされた，と後に彼自身も述べている．

先の主人公ペーターは都会の人間の我執と利欲と虚栄の生活に失望し，自分自身の心の故郷に生きる事こそ本当の生活であると考えるが，ここに

みられる反文明，反都会，反社会という思想は，実は主人公の「聖フランシスのように人間を愛する無我の心」から出たものであり，またそれはヘッセがその文学において最後まで崩す事のなかったヒューマニストとしての姿勢でもある．だがこの作品においては，作者の社会に対する抗議は個人の内面に投影されており，未だ政治的な意義はみられない．

『車輪の下』においても作者の目はもっぱら主人公の内面に向けられている．無理解な教育という重圧が純粋な心を打ち砕いてしまうというこの小説の呈示している問題は多分に社会的なものではあるが，その解決はハンス少年の心の中でしか求められてはいない．この作品の暗く寂しい結末は『ペーター・カーメンチント』のそれとは対称的であるが，共に作者ヘッセの目は個人の内面世界を離れきれずにいる．このあくまで自己の内部を窮めようとする精神主義はヘルダーリンやメーリケといった敬虔なシュワーベン地方の人々によく認められるところであるが，詩人以外の何者にもなりたくはないと考えていたヘッセにとっても，このドイツ的内面性（deutsche Innerlichkeit）はやはり必然的なものであった．非社交的であり，あらゆる意味の束縛を好まない，とは作者自らたびたび認めているところであるが，このような性格の少年が成長するまでには社会の様々な通念との衝突は避けられなかったであろうし，また反面この葛藤が彼の初期の作品をうみ出す大きな力となった事も容易に想像される．従って創造力を伴った彼の内向型（introvertiert）の性格[4]は外世界からの単なる逃避に終るものではなく，個人の内面世界に外世界の生き生きとした反映をみようとするものであり，本質的に外的な政治的罪悪をも見逃がすものでは決してなかった．

このような状況の下で，1914年に勃発した第一次世界大戦は，以前の神学校時代に彼自身の内面の声と外世界との間に和解の声を見出さなかったがために起った変化と同様の変化を，今度はディヒターとしての彼に与えた．「私は政治的な道を辿り始めていました．ひどく立ち遅れて，もうや

がて40にも手が届こうという歳になって」と後に彼は述べている．彼は開戦2ケ月後の9月に『ああ友よ！そんな調子の歌はやめて下さい』(O Freunde, nicht diese Töne!)を新チューリヒ新聞に発表した．この論文は偏狭なドイツ主義をこえて人間性に対する歓喜を称えたゲーテを例にあげ，戦争という現実を目の前にしたドイツ人が一体何をなすべきであるのかをあらためて問いかけている．この中で彼はあくまで芸術家として，例えば敵国であるイギリスやフランスの書物を禁ずる事の愚かさ，ケルナーの『愛国の歌』をドイツの解放戦争から遠ざかっていたゲーテのものよりも優れたものだと賞賛する事の無知を訴え，ゲーテをむしろ思想の世界，内心の自由，知性的良心の国際的世界の市民であり，その意味で真の愛国者だと称えている．この頃彼は「国際的」(international)という語をしばしば用いているが，彼の主張はまさに国境を越えた人間から人間への声であった．この呼びかけに対してフランスのロマン・ロランから寄せられた共鳴の手紙はヘッセを強く勇気づけたにちがいない．

しかしながら，ドイツ国民へのこの控え目な問いかけに対する反応は，意外にも愛国主義と戦争精神を批判するものとうけとられ，後々までもその誤解が解かれる事はなかった．当時彼のもとへは罵倒と侮蔑の手紙が寄せられ，それまでの新聞との接触は唾棄され，彼は故郷の新聞からまで裏切り者のレッテルをはられる事になった．

当時開戦と同時に起こった国内政治の最大の変化は，世界最大の社会主義政党として第二インターナショナルの中核であり帝国主義戦争に反対してきたドイツ社会民主党が，政府と手を結んで階級闘争を中止したばかりか積極的に政府や軍部の戦争遂行に協力するようになった事である．理論を軽視し現実に追随する事に馴れた彼等の目にはこの帝国主義戦争も祖国防衛戦とうつり，開戦と共に国民の大部分を襲った激しいショーヴィニスムの熱病にも彼等は抵抗し得なかったのである．カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルクのようなあくまでこの戦争に反対した人々を例

外として国内の改革運動の大波も一時に引き退き，独占資本家とユンカーの夢を賭けたこの戦争には国民のあらゆる階層がほとんど一体となって突入した．このような熱狂的な状況の中でヘッセの冷静な訴えがほとんどの人々にまともには受け入れられなかったのは容易に想像されうる事である．

ヨーロッパの他の知識人達のこの大戦に対する反応も，また例外ではなかった．ロマン・ロランは評論集『戦いを超えて』(Au-dessus de la mêlée. 1915) の中で，独仏両国が互いを野蛮国とののしりあっている時にもそれぞれに高い精神を堅持する人々がいる事を称えながらも「戦争の開始この方，知識人達はいずれの陣営においても大いに活躍した．この戦争はさながら彼等の戦争であると言ってよいほど彼等は激しい情熱をこの戦争に注いだ」と述べているように，この戦争の一途で正気を失った恍惚状態は，将来を期待し，新しい英雄を憧れていた一般国民だけのものではなく，冷静であるべき知識人の心をも激しく動揺させていた．

ヘッセと同じくロマン・ロランの偉大な心と熱情的な理性によって魅惑され勇気づけられ，また生れながらのコスモポリタン或いは現代のエラスムスをもって任ずるシュテファン・ツヴァイクですら次のような言葉を残している．

「事実を重んずるために私は告白しなければならないが，この最初の群衆の出発には何か堂々たるもの，感動的なもの，そして魅惑的なものさえ含まれており，それから脱する事は困難であった．そして戦争に対するあらゆる憎しみと嫌悪とにかかわらず，この最初の頃の思い出を私は生涯において見失いたくはない．これまでにないくらい幾千幾十万の人々は平和の時においてもっと感じていなければならなかった事，すなわち彼等は一つであるという事を感じたのであった」[5]．

このように一般国民と同様に，いやそれ以上にこの戦争に血道をあげ，愛国と憎悪の歌をうたった知識人たちの中で，この「憎悪の戦争」或いは「ペンと舌との戦争」[6]に参加しなかったヘッセ，ロラン，ハインリヒ・

マン[7]等はむしろ例外であったとさえ言える．これに対して例えばハウプトマンやデーメルを先頭に，ほとんどすべてのドイツの詩人は「原始ゲルマン時代のように弾唱詩人として，前進する兵士達を民謡や古代詩で死の感激に燃え上らせる義務があると感じ，戦争と勝利，苦しみと死の韻を合わせた詩がおびただしく降り注いだ」[8]とツヴァイクは述べている．またこの事情は作家や詩人のみならず学者達にも同様であった．ドイツ軍によるベルギーの中立侵犯を弁護する「93人の知識人宣言」(1914)には，歴史家のマイネッケ，経済学者のシュモラー，ブレンターノ，ゾンバルト，自然科学者のレントゲンらの碩学が名を重ねたが，その中には「ドイツの軍隊とドイツ国民は一体である．このような意識が今日7千万のドイツ人を教養，身分，党派の別なく一つに結びつけているのだ」と書かれている．

このように見てくると，様々なドイツ国民があらゆる区別をこえて一体となり，人々が誰でも英雄になれるというロマンティックな夢に酔っていた当時の異常な状況の中で，ヘッセの警告が悪意に誤解された理由は明瞭である．

ヘッセと同時代人であるトーマス・マンも同様の運命を負うていたわけであるが，彼は1930年に書いた略伝の中で第一次大戦の勃発に関して次のように述べている．

「私はこの道を国民と相共に踏みしめていった．私の体験の一歩一歩は，また国民の一歩一歩でもあった．だから私はこれを是認したい．——(中略)——画期的な時代転換の感情というものは個人生活にも不可抗的な腕をさしのばさずにはいなかったが，これは当初からすこぶる強烈に私の胸の中にあった感情であり，戦争に対する私の態度に，あのドイツ的で積極的な性格を付与したあの運命の陶酔の根底をなすものであった」[9]

戦争が始まると，マンはそれまで書き続けてきた『魔の山』(Der Zauberberg. 1924) を中断して，『フリードリヒ大同盟』(Friedrich und

die große Koalition. 1915）というエッセイで自己表明をした．しかし西欧の民主主義と対立し，祖国の精神と文化を擁護するために熱心に戦争を支持するという彼の態度は，後にドイツの内外からひどい非難をうける事になった．ロランはこれを「マンの文明と文化のアンチ・テーゼに関する大たわけごと」とののしり，さらにツヴァイクに宛てても次のように書き送っている．

「マンがフランスについて言っている事は恥ずべき事です．彼がドイツ軍の行なった蹂躙について語っているその蔑むべき軽率さを私は到底許す事が出来ません．この知識人が書斎の机の前に安楽に坐りこんで，フランスの国民が軍務に服し，忍苦しながらも英雄的な喜びをもって身を捧げつくすのを卑しげに嘲けるのを，私は到底許す事はできないのです」[10]．

さらにマンは，実兄ハインリヒ・マンにも，今時大戦においてドイツの権力に便乗してドイツ帝国主義の世界制覇の野望と国際法侵犯の弁護人になり下った作家の一人であると厳しく非難されている．

このように見てくると，本来資質の異なったヘッセとマンの第一次大戦に対する当時の考え方の相違には興味深いものがある．結局，マンは人間性の異常な暗黒面に人一倍敏感であるという芸術家の本能故に，この戦争を偉大な運命的一瞬として陶酔的にとらえたのであり，後にはこの政治的反動化を洞察してファシズムと対決する事になった．詩人や作家はこのような状況の中で，愛国主義の仮面をかぶった殺人狂となるか，裏切り者の汚名をきた人間性の名に価する存在になるかの選択に迫られる事になるが，ヘッセは自らの信ずる道を歩むために汚名をきる事を拒みはしなかった．また戦中戦後を通じて常に不偏不党の立場にあり，束縛的なものはすべて好まないというヘッセの信条は交友関係にのみならずあらゆる政治組織への不信となってもあらわれた．彼は戦後ワイマル共和国時代には，自主性を失って堕落したドイツ社会民主党に失望し，後にはプロイセン芸術アカ

デミーからの脱退の理由に，まずワイマル共和国に対する不信をあげている．この時マンは，自分もアカデミックな束縛は好まないが，それにもかかわらず自分がそのような招請に応ずるのは，一種の社会的な時代的な義務感からにすぎないと述べているのに対し，ヘッセはそれをドイツ国民個々人の問題としてとらえ，ドイツの全体主義的な暴挙の責任は，まさにその社会を義務感によって先導したごく一部の指導者にこそあるのだと反論している[11]．

このように第一次大戦の体験は，ヘッセに自分の内面世界に対する外的世界の曖昧さ，もろさ，矛盾を認識させ，同時に自身のディヒターとしての価値を振り返らせ，信じていたものをも疑わせる事になった．やがて彼は「真に生きる価値のあるもの，本当に僕等の心を充溢し，仕事をさせ，呼吸をとめさせる程のものは決して僕等の外部にあるのではなく，僕等の心の内部にあるのだ」と考え，戦争，殺意，享楽というような外的世界の諸悪を自分自身の中に再認識せざるを得なくなった．またヘッセの言うこの時期の「仏教徒のような」沈潜は彼の外見的な文学活動を抑え，創作量を乏しくしたが，この自己省察は以後の様々な作品に生かされており，その後の文学に底の深い内面性が加わったという意味で大きな転機をもたらした．つまり彼のそれまでのアウトサイダーとしての生き方には依然として消極的な面のある事は否定できないのであるが，これを契機としてそれは徹底的かつ積極的な「自分自身への道」となったのである．当時沈黙を守る事を余儀なくされたヘッセがベルン公使館で捕虜への奉仕活動に没頭しながら書いた数少ない作品には，これまでのような自然憧憬やセンチメンタルな感情の表現はもはや見られない．戦争をまともに批判するという事こそ許されはしなかったが，ここにはむしろ大戦というどうする事も出来ない現実をしっかりと見つめ，それを心の奥底で体験しようとする彼のディヒターとしての意欲が明白である．大戦直後に書かれた『ヴァガヴァド・ギータ』(Bhagavad Gita)『少女がうちですわって歌う』(Das Mäd-

chen sitzt deheim und singt . . .) には，残酷で無意味な戦争に対する直接的な告発が見られるが，同時にこの頃の詩には，悲惨な現実の世界と並んでもう一つの永遠の世界が人間の精神の領域に存在する事がうたわれている．前者の中には次のような詩節がある．

戦争と平和，いずれも同じことだ．
死は精神界には触れないのだから．

平和のはかりざらがあがろうがさがろうが，
世界の苦痛は減りはしない．

だから，じっと寝てしまわないで，戦え．
おまえの力を働かしていることが，神の意志だ．

だが，おまえの戦いが無敵の勝利を得ようと，
世界のハートは，かかわりなく，打ちつづけている．

（高橋　健二・訳）

このような永遠の世界の存在は，子供の頃からヘッセの心の中で，ある時は空に浮かぶ雲への憧れとなって，またある時は母や聖フランシスへの思慕となって，また誠実な友情となって，様々に予感されてきたものであるが，彼にとってはこれらの感情の本質であり，あらゆる善意と喜びの核心でもあるこの「愛」が，戦争という最も苛酷な精神状態においても，依然として失なわれていないどころか，かえってより力強く前面へ押し出されているところには，ヘッセの文学の核心となっている考え方がうかがわれる[12]．

さらに大戦中及び戦後の詩には，「運命」(Schicksal)，「現し世の姿」

(holder Schein)，「永遠なもの」(das Ewigkeit)，「本質」(das Wesen)，「お前自身に」(in dich selbst) というような内省を伴った言葉が多く見られている．やがてそれらは，人間各自が我慢強くその運命を受入れ，神の意志に従って生きようとする精神の力によって，「楽園」(Paradies) や，「世界と神」(Welt und Gott) や「祈り」(Andacht) というような宗教的な言葉にまで高められている．これはまた，ヘッセの信仰告白とも言うべき『シッダルタ』(Siddhartha. 1922) や『東方巡礼』(Die Morgenlandfahrt. 1932) に至る諸作品の中でも常に繰り返された彼自身の生の方向であり，後にヒトラーの残虐な行為に対する最初の印象からうまれた注目すべき『沈思』(Besinnung) の中にも次のような詩節がある．

精神は神のごとく永遠である．
われらはその似姿であり道具であって，
われらの道はこの精神に向かっている．
われらのせつなるあこがれは，
精神のごとくなり，その光に輝く事である．
——(中略)——
人間の道は困難で，罪と死がその糧である．
しばしば彼はやみに迷い，生れざりしならばと，
感ずることもしばしばである．
しかし彼の上には永遠に彼のあこがれと使命が輝いている．
すなわち光と精神とが．
そしてわれらは感じる，危きもの，人間を，
永遠なものは特別な愛をもって愛しているのを．

(高橋　健二・訳)

このような「信仰によって生き得ること」「忍耐強い愛によって人類が

同胞となり，神聖な目標に近づき得ること」に対する信念こそ，この時期の彼の詩や評論にみられる抗議と深い内省，悲惨な現実と永遠の安らかさを相矛盾させることなく並存させた大きな力であったと思われる．

こうして，ヘッセは戦争という罪悪を他の者の責任においてではなく，自分自身の中で解決する事を迫られて，しばらくの間沈黙を守ったのであるが，この時期の沈潜の反動として終戦後数年間は創作面で非常に実り多い時であった．さらにこの時期の彼の最大の収穫とも言うべき『デーミアン』(Demian. 1919) は，それまでの戦争体験とノイローゼの精神分析的治療によって得られたものを新たな気持で描き出し，その事によって新しい出発を企てた画期的な作品である．ここでヘッセはそれまで外世界に見出した悪，暗黒の世界を自らの内部にも見出し，その潜在的な衝動と対決する事によって新たな自我と生を見出している．この作品の中で象徴的に描かれているアプラクサスは，他ならぬ作者自身の精神である．アプラクサスは新しい世界に生れ変わるために古い殻を破るが，これによって既成の道徳や旧弊な伝統をつき破り，新しい時代を欲するという当時の時代的欲求をヘッセは作品に託して強烈に描き出している．またこれと同様の考えが『カラマゾフ兄弟，ヨーロッパの没落』(Die Brüder Karamasoff oder Der Untergang Europas. 1919) の中で「アジア的理想」(ein asiatisches Ideal) として繰り返されているが，そこでは次のように述べられている．

「カラマゾフの理想が，非常に古いアジア的神秘的理想が，ヨーロッパ的となり始め，ヨーロッパの精神を食い尽くし始めている．それが，私がヨーロッパの没落とよぶところのものだ．この没落は，母へ帰る事を意味する．それはアジアへ，源泉へ，ファウストの母達へ帰る事であり，地上のすべての死のように，新しい誕生に通じるであろう」[13)]

このヨーロッパの現状に対する幻滅と期待は『デーミアン』の中でも明確に表現されているのであるが，そこには生れ変わるためには死をも厭わ

ぬ「死して成る」「炎の死を憧れる」というゲーテの理想があらわれている[14]．ヘッセのこの「アジア的理想」という言葉は，ここで臨場感を伴って言語芸術の限界をも忘れさせる程の迫力をもっている．

また『デーミアン』によって初めて，ヘッセをとりまく外世界と彼自身の内面世界の対立が作品の中で明確な形でとりあげられており，以後これは両極性（Polarität）として彼の創作の根本理念となっている．さらに徹底的に自分の内面を見つめようとする目は，同時にまたそれだけ外世界を客観的に見つめる事を可能にもした．つまり彼の内面と外世界とは，内面に潜む生命を認識する事によって統合へと近づけられたのである．彼はキリストやブッダを例にあげて，最高の認識が存在するところでは敵は兄弟となり，死は生誕となり，恥辱は栄光となると考え，『戦争と平和』の中では，「外部の世界はひとりただ私達の知覚の対象であるだけではなく，同時にそれは私達の心の創造であるという経験をもとに，外部の世界と内部の世界を私という世界に変様する事によって暗夜は明けてくる」と述べている．つまり彼は自らの認識を窮めることが外世界を変える事に資すると考えているのである．この言葉は，この背景となっている時代的状況を考え合わせてみると，ドイツ文学特有の神秘主義的思想から出たというよりも，むしろヘッセのディヒターとしての独自の生き方を表現していると解釈できる．

つづく『クラインとワグナー』（Klein und Wagner. 1919），『クリングゾルの最後の夏』（Klingsors letzter Sommer. 1920）『シッダルタ』第一部[15]は，戦争体験によってヘッセの文学に提起された問題をよりつきつめてゆくための舞台となったという意味で一つのまとまりをもっており，これらは，後には作者自身によって『内面への道』というタイトルで一冊にまとめられた．この『クラインとワグナー』にも，後に『荒野の狼』や『ガラス玉演戯』に結論的にあらわれている大乗仏教的な人間の内面と外世界の統合への努力が見られる．この作品は，ヘッセ自身が自分の

内部に潜む精神分裂症的素質を，実際にあった事件に投影させたものであると考えられるが，この主人公にみられる二面性，つまり市民と犯罪者，家庭人と殺人者，クラインとワグナーは，主人公がボートから身を投げ出して自らを捨てようとした時に，つまり「死の中へ飛び込む」ことによって，この分裂の不安から救われる．水に溺れようとするクラインにとっては恐怖も不安もなく，ただ解脱があるだけである．これは，同年にその第一部が書かれた『シッダルタ』にも通じる仏教的救世観であるが，これを時代的背景において考えてみると，この大戦がヘッセの内面に与えた影響力の大きさと彼の思惟の深さには驚かされる．ここでも主人公の内面と外世界の嵐とは少しも対立或いは矛盾するものではない．むしろこれらは相反しつつもまた相補ってクラインの生命を燃焼させる原動力となっている．彼の内心の声は彼に向って，汝自らを投げ出せ，抗ってはならぬ，喜んで死ね，また喜んで生きよ，とよびかけている．自らの身を投げ出してひたすら自分の道を進めば，死さえも新たな生となり，その道は神へと通じている．没落も新たな生を意味するという考え方は，次の『クリングゾルの最後の夏』にも見られるが，これがすべて大戦の体験から出たものである事は，次のクリングゾルの言葉からも明らかである．

「僕等は没落の中にいる．僕等は一人残らず死んでゆかねばならない．そしてまた新しく生れ変ってこなければならない．僕等の偉大な転換期が来たのだよ．どこへ行っても同じ事さ．大きな戦争，芸術の偉大な変革，ヨーロッパの諸国家の偉大な崩壊．——(中略)——僕等の美しい理性は狂気に置き換えられてしまった．僕等の紙幣は紙屑になり，僕等の造った機械と言えば，ただもう射つ事か，爆発する事しか出来はしない．僕等の芸術はつまり自殺行為さ．僕等は没落してゆく」[16)]

クリングゾルは，芸術家としてあらゆる思想と感情の後に潜む虚無を克服しようとしているが，生誕に満ち，腐敗に満ち，神と死に満ちる一切のものを描こうとするこの作品はメルヒェンになろうとしながらもそれにな

りきる事が出来ない．またそれに到達できないところにこそ，作者の現実に対する鋭い批判と，その現実の重みが感じられる．

これらの作品に見られるように，いかなる苦難の中でも，ヘッセの文学の絶望を絶望として終らせてしまわなかったものが，これらの根本にある両極の統合を可能にした力なのである．絶望から自殺を試みたシッダルタやハリー・ハラーの生き方は，結局人生の肯定に終っているが，ここでヘッセが『ああ友よ！そんな調子の歌はやめて下さい』の中で述べた「人生が生きるに価するという事こそ，すべての芸術の内容であり，慰めである」[17]という言葉が意味深く思い出されるのである．

このように，彼の文学における転機となった戦中戦後の作品をながめてみれば，ヘッセは大戦という罪悪をヒューマニストとしての冷静な目で見つづけながら，ある場合にはそれを客観的に非難し，またある場合にはそれを個人の内面世界の問題として実存的にとらえるという方法で第一次世界大戦と対決してきたが，それに伴う不安と絶望は，彼の持つ強靱な精神力によって内省と真の現実把握へと転換され，彼の文学に，より深遠なもの，より本源的なものに満ちた後の『シッダルタ』や『ガラス玉演戯』の新しい境地を開かせるに至った．当時の若い表現主義作家達が，文明への懐疑と抗議，物質文明による人間性喪失や絶望の中で，ともすれば抽象的，図式的な作品に終ったなかにあって，ヘッセはそれを神への思慕，人間愛の強調へと高め，永続的な生命をもった独自の文学を作り出したという意味で，大戦の体験は彼の文学にとって意義深いものであり，当時の精神の混迷の中で表面的，時間的な爆発にとどまった他の作家達とも，その文学の深さと政治的な問題をも包容してしまう精神の大きさによって，はっきりと区別されるべきであると私には思われる．

テキスト Hermann Hesse : Politische Betrachtungen. Suhrkamp Verlag, 1972 (Hesse : P. B.)

Hermann Hesse : Gesammelte Schriften in 7 Bänden. Suhrkamp Verlag, 1968 (Hesse : G. S.)

註

1）Der Steppenwolf. 1927

2）Das Glasperlenspiel. 1943

3）『戦争と平和』芳賀檀・訳　人文書院　昭和40年　11頁

4）ユング（Carl Gustav Jung 1875—1961）の分析的心理学によれば，ヘッセの作品にあらわれている性格は「内向的タイプ」（introverted type）であるが，彼の文学においては，大戦中もやはり内的現実に重きをおく考え方が中心になっている．

5）『昨日の世界・Ⅰ』原田義人・訳　みすず書房　1973年　329頁

6）第一次世界大戦は「人類最初の普遍的な憎悪の体験」（Max Scheler），「憎悪の知的組織化の世紀」（Julian Benda），「人類の敵味方への二分法」（W. Rothe）の出発点などと呼ばれた．

7）Heinrich Mann（1871—1950）は『ゾラ論』の中で，社会批評家としてのゾラを描く事によって大戦における帝国主義に対する彼自身のポレミックと，デモクラシイ陳営の究極的な勝利を暗に予言した．

8）『昨日の世界・Ⅰ』339頁

9）『知識人と政治』脇圭平　岩波書店　1973年　25，26頁

10）　〃　27，28頁

11）Hermann Hesse　Thomas Mann Briefwechsel. Suhrkamp Verlag, 1968 S. 16ff.

12）Der Weg der Liebe. 1918（Hesse : P. B., S. 38.）の中でヘッセは，「愛の道，正義の道を最後まで進めば，その時こそ我々は敗戦の価値と未来の運命を知る事ができる」と述べている．

13）Hesse : G. S. Bd. 7, S. 162.

14）Dank an Goethe. 1932（Hesse : G. S. Bd. 7, S. 370.）には，精神と道徳の内的葛藤状態にあった大戦中のヘッセにとって，ゲーテが新しい意味をもった象徴となったと，あらためて称えられているように，ゲーテの彼に与えた影響は大きい．

15）『シッダルタ』第一部は1919年に完成され，第二部は1922年に完成されて，それぞれロマン・ロランとヴィルヘルム・グンデルトに捧げられた．

16）Hesse : G. S. Bd. 3, S. 591f.

17）Hesse : P. B., S. 13.

上記以外の参考文献

Hugo Ball : Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk. Suhrkamp Verlag, 1967

Christian Immo Schneider : Das Todesproblem bei Hermann Hesse.
N. G. Elwert Verlag, 1973
Siegfried Unseld : Hermann Hesse—eine Werkgeschichte.
Suhrkamp Verlag, 1974
Hermann Hesse Gesammelte Briefe 1. Suhrkamp Verlag, 1973
Bernhard Zeller : Hermann Hesse. Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1963
ヘッセ研究　高橋健二（新潮社，昭和41年）
ユング心理学入門　F・フォーダム　吉本訳（国文社，1974年）
ドイツ史　林健太郎編（山川出版社，昭和46年）
ドイツ文学史・下　相良守峯（春秋社，昭和45年）
ドイツ精神と西欧　E・トレルチ　西村訳（筑摩書房，1970年）
ロマン・ロラン全集　26〜30巻　片山訳（みすず書房　昭和40年）

Hermann Hesse und der erste Weltkrieg

Yutaka Aoyama

Für Hesse spielte der erste Weltkrieg die große Rolle, seiner Literatur einen Wendepunkt zu bringen. Hesses frühe Werke sind voll von romantischer Atmosphäre, worin aber innerer Zwiespalt schon keimt. Bald wurde der Zwiespalt in seiner Innenwelt durch Unterdrückung in seiner Außenwelt zu ernster Bedrängnis vergrößert. Darin fand Hesse aber eine ewige Welt und Erlösung auf. Das machte seine Werke nach dem Krieg schon innerlicher und tiefsinniger.

Die sozialen und persönlichen Unterdrückungen ließen die Gegenkriegsklage von Hesse mißverstehen, und er mußte den Mund halten und in tieferes Nachdenken versinken. Aber das Schweigen ermöglichte es, seinen Blick auf die Außenwelt zu wenden und die eigentliche Rolle des Dichters zu erkennen.

In dieser Hinsicht ist „Demian" das entscheidende Werk, mit dem Hesse literarisch wiedergeboren zu werden wünschte. In diesem Werk wollte Hesse die förmliche Moral und die veraltete Tradition durchbrechen und ein neues Zeitalter erreichen wie der symbolisch geschilderte Abraxas.

Die gesammelten Werke in „Weg nach Innen" erklären auch genügend das Verhältnis zwischen Hesse und dem ersten Welt-

krieg. Hier scheint Hesse den Untergang Europas mit einem asiatischen Ideal ironisch zu verlangen, aber er ist völlig überzeugt, daß er danach eine glänzende Zukunft erblicken wird. Denn die Helden in diesen Werken bejahen das Menschenleben am Ende, und eben darin kann ich die Lebensweise von Hesse als Humanisten finden.